感性の表現の地域差
－オノマトペで考える－

友定　賢治

はじめに

本稿は、オノマトペを通して、感性の表現の地域差を考えようとするものである。

ただ、方言オノマトペの資料は十分ではない。各地方言集に、俚言としてオノマトペが収録されているものはあるが、個々の特異な語を挙げて、すぐにオノマトペの地域差とはいいにくい。地域差を考える資料としては、特定地域のオノマトペ記述として、室山（1971）、広田（1982）では網羅的な記述があり、川越（2011）では特徴的な型について報告している。全国分布については、国立国語研究所編『日本言語地図』に、「もうもう（牛の鳴き声）」、「ほうほう（梟の鳴き声）」、「ちゅんちゅん（雀の鳴き声）」の3枚がある。方言研究ゼミナール（1992）は、身体感覚分野について、統一した調査票に基づいて、全国40地点の報告をまとめている。また、宮城と高知を比較してオノマトペの地域差を考察した齋藤（2007）がある。これらに限定されているのが現状であり、方言オノマトペの資料・考察は絶対的に不足している。均質で充実した資料の整備と、それに基づく考察は今後の大きな課題である。

ここでは、各地の談話資料や各種調査等によって、次の3点に絞って、地域差を考えていく。

1. ある表現をする際にオノマトペを用いるかどうかの地域差―東西差―
2. オノマトペ動詞（「～めく」）の地域差―周圏論的分布―
3. オノマトペの用法の地域差―関西方言での用法―

なお、「1」については、小林・澤村（2014）によるところが多いことを明記しておく。

1. ある表現をする際にオノマトペを用いるかどうかの地域差―東西差―

竹田晃子は、東日本大震災の被災者の方言が医療関係者やボランティアに通じないことがあるという問題の解決に役立てるため、『東北方言オノマトペ用例集』（試作版2　2011）を作成している。これを見ていくと、共通語ではオノマトペで表現しないと思われる用例がかなりみつかる。例えば次のようなものである。

- すっかりかたかたとならして結構でございます。（まったく健康におなりになって結構なことでございます。）
- せっかくの退職金、ちゃちゃぼちゃにした。（せっかくの退職金を無駄にした。）
- とろっと寝る。（いつも寝ている。）
- ごえら悪くなってた。（突然悪くなって

た。）

小林（2010）は、「大声で泣く様子」の地図を示している。

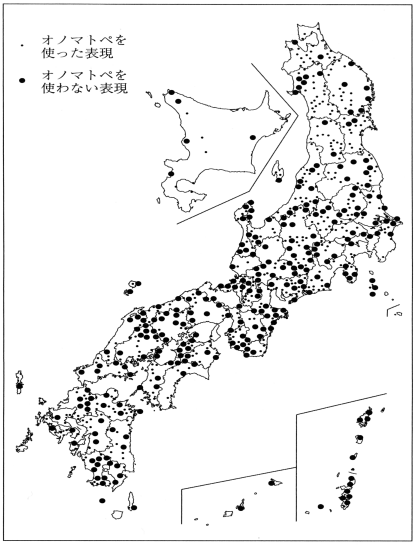

図1

この地図について、

「大声で泣く様子」をオノマトペで表現するのは東日本、特に東北地方であり、西日本では、副詞句や形容詞、動詞によって表現する傾向が見られる。この傾向は、現場性の強い直接的な表現が好まれる東日本と、現場性の弱い間接的な表現が好まれる西日本といった表現の志向性の違いが現れたものであり、日本語の発想法の歴史を反映している可能性がある。

と説明している。

また、澤村（2010）は、「失敗した時に、思わず口にする言葉は何ですか。」という分布図を示している。

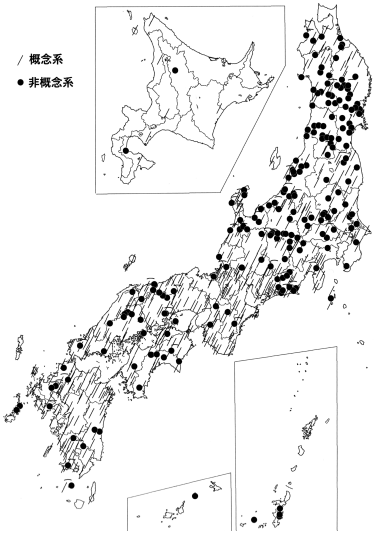

図2

凡例の「概念系」「非概念系」については、下記のように説明している。

概念系

動詞・形容詞・名詞など概念的な言葉に由来するもの。

非概念系

指示語やオノマトペ、あるいは生理的な音声など非概念的な要素に由来するもの。

さらに、齋藤（2007）は、高知県と宮城県のオノマトペを比較対照し、次のような結論を得ている。

宮城→語形変化のアレンジを加え、場面によりふさわしい語を生み出している。

《例》痛みを表す語

「ズキ」という語幹をもつ語として、「ズキズキ」「ズキーン」「ズキンズキン」がある。

高知→語形が安定しており、ほぼ固定

している語形をいかに使うかという用法への関心が強い。

《例》「ギッチリ」→継続的な時間とともに状況にあわせた様々な意味を表すことができる。

これらの結果から、東北は西日本に比較して、オノマトペで表現する傾向が強いと考えられる。小林・澤村（2014）では、ものの言い方に関する志向や好みを「言語的発想法」とし、発言性・定型性・分析性・加工性・客観性・配慮性・演出性の7つを設定し、「言語的発想法の発達状況」について下記のような地域差を認めている（p.170）。

発達地域	近畿地方
準発達地域	西日本（九州を除く） 関東地方（特に東京）
準未発達地域	東日本（東北を除く） 九州・沖縄地方
未発達地域	東北地方

近畿と東北が大きく対立し、さらに、中心部対周辺部、東日本対西日本といった対立のあることが分かる。

2.オノマトペ動詞（「～めく」）の地域差―周圏論的分布―

方言研究ゼミナール（1992）は、身体感覚のオノマトペを、共通調査票に基づいて、全国40地点からの報告を集めたものである。質問は、

・海水浴で日焼けして、背中が～する。
・空気が乾燥して、肌が～する。

といった形で示している。多くの地点の報告は、質問文の「～」の部分にオノマトペが入るものであるが、青森県東津軽郡平内町方言（渡邉修平担当）には、

当方言において、「ドキドキ・ガンガン」のようなオノマトペは日常的に高い頻度で使用されてはいないようである。むしろオノマトペを構成する一部の要素に「～メグ」あるいは「～（ラ）トス」（～とする）が接続した形で用いられるのが一般的であり（以下略）

とある。具体的には、

ウ゛ジャメグ	寒気がする
ピリメグ	ひりひりする
ゴソメグ	肌ががさがさする
ドキメグ	傷がずきずきする
モヤメグ	目がちかちかする
ゴロメグ	目がごろごろする
グズメグ	鼻がぐずぐずする
ガラメグ	喉がからから
ムカラメグ	胃がむかむかする
ブルメグ	手が震える

といったものがある。いずれも共通語では使用しない形である。

さらに注目すべきは、鹿児島県与論島方言の報告（町博光担当）にも、

本土方言が象徴詞で表すところを、与論島方言では、動詞や形容詞によって表現している。そのさい、tʃiramikjuN（チラチラする）gakumikjuN（ガクガクする）などのように、象徴詞の一部をとりこんだ形で動詞を形成していることが注目される。

とあり、沖縄県国頭郡方言の報告（生塩睦子担当）においても、

当方言における身体感覚を表す象徴詞は、伊江島方言においては、語彙量も少なく、使用頻度も少ないように思われる。

これは、「ティーラチュン」のよう

に、共通語では「ひりひり痛む」（象徴詞＋動詞）二語で表される意味内容を動詞一語で表すことができること、また、「ドンメカシュン」「サーメカシュン」のように、象徴詞に接尾語「メカシュン」がついて動詞一語で表すことができることなどにもよる。

とあることである。いわゆる周辺部に同様の特徴がみられる。これは、方言周圏論的分布であることをうかがわせる。

一方、中央語の場合、中里理子氏のご教示によると、古典語（岩波古典文学大系データベースによる）でも、

◎擬音語に由来すると思われる語

あめく／うめく／くつめく／がらめく／くゎくゎらめく／ぎぎめく／こぼめく／ささめく／ぞぞめく／そよめく／だくめく／つつめく／つぶめく／どどめく／どよめく／はためく／ひしめく／ひよめく／ぶめく／ほとめく／をめく

◎擬態語に由来すると思われる語

きらめく／くるめく／ぞろめく／ちらめく／ひらめく

ふためく／ほのめく／ゆらめく／よろめく

◎現時点で不明な語

ひろめく（「びりびりとひろめきてやがてしぬ」：古今著聞集）

むずめきひりめきて（保元物語）

などが見られ、現代語より多様であることが分かる。これらの結果から、方言周圏論的な分布と考えられる。つまり、「オノマトペ＋めく」という動詞によるものから、「オノマトペ＋する」のような副詞用法に変化したと考えられるのである。

この変化が、「ゴロめく」と一体化しているものが、「ゴロゴロ＋する」と二分され、より分析的・客観的な表現になっていると考えられるとすれば、上記の小林・澤村（2014）による言語的発想法の地域差に見られた、「発達」と同様の性格を指摘できると思われるが、他のどのような変化と共通するものなのか、日本語表現法のどのような変化と位置づけられるのか、今後の課題としてさらに考えていきたい。

3.オノマトペの用法の地域差―関西方言での用法―

関西人は、オノマトペを多用して話すというイメージがある。このことに言及したものは多い。三島由紀夫は『文章読本』の中で、「だいたい関西の人の方が、東京の人と比べると日常会話にも擬音詞をよく使ひます。」と述べている。

郡（1997）でも、大阪府方言の特徴として、「擬態語の多用」を挙げており、

擬態語の多用は話におかしみを与えるという側面がある。

と説明している。笑い・楽しさを大切にする話し方の要素としてオノマトペが役立っているのである。

田原（2001）は、「ピャッとちぎってシャッと渡す」というタイトルで、やはり関西人のオノマトペ使用の多さを指摘している。関西のテレビ番組で、1997年に放映された、芸人の上岡龍太郎・笑福亭鶴瓶が一時間ひたすらしゃべる「パペポTV」を資料として分析し、

オノマトペの数　602発話

オノマトペの種類　254種

であったという。そして、「関東の番組に

比べると、使用される頻度が圧倒的に高い」と述べ、最も使用頻度の高い語は「ガー」で、

「勢い込んで何かをする様子」であるが、動作の種類は限定されず、多くの動作に対して用いられる。

としている。

平田佐智子他（2012）は、「どこの地方の人がオノマトペを多く使って話すと思いますか」というアンケート調査をしているが、結果は図3のとおりである。やはり近畿地方が多くなっている。

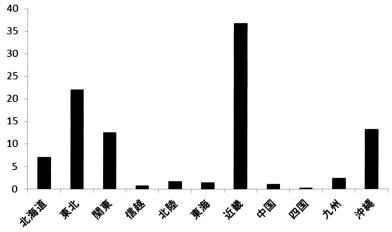

図3

また、製薬会社が、「体の痛みをオノマトペを使って医師や看護師に表現することがあるか」というアンケート調査を行い、「よくある」と答えた京都府民が45・5%、「ときどきある」と答えたのが44・5%。合わせると、90%の人がオノマトペを使って病状を説明していた。このほか、2位は滋賀県、3位は和歌山県で、　以下、4位・石川県、5位・香川県、6位・大阪府　となり、7位には岡山県と静岡県が同率で入ってくると産経新聞（2014.1.18）に紹介されている。

このように、関西人がオノマトペを多用するという説明は多く認められる。ただ、このことを証明する談話資料となると、きわめて困難である。同じ話題で、話し手も同じ条件の人でという全国各県の談話資料は存在しないし、それを作成することはまず無理である。さらに、オノマトペ使用には個人差も考えられる。上記の平田他（2012）では、自分がどれくらいオノマトペを使用するかという質問もしている。それによると次のような結果である（図4）。

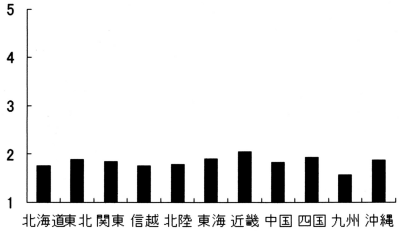

図4

これで見ると、地域差はほとんど考えにくい状況である。このことから、平田（2012）は次のように述べている。

実際のオノマトペ使用頻度と、各エリアの住人に対してもつオノマトペ使用頻度イメージに食い違いが生じていることがわかった。さらにそれを引き起こしているのは、親戚や友達など身の回りの人物の影響もあるが、芸能人を中心としたマスメディアの影響が強いことが明らかになった。これらの結果は、今まで実証的な検討がされてこなかった「関西の住人はオノマトペをよく使う」という通説が、事実としては存在せず、マスメディアによって形成されたイメージである可能性を示唆する。

次に三井・井上（2007）は、『全国方言談話集成』を資料としてオノマトペ使用の地域差を整理している。この資料は談話の話題も時間も統一されていないので、一分間あたりのオノマトペ出現数と

表1

都道府県別出現数

順位	都道府県	のべ用例数	1分あたり用例数	収録時間（分:秒）	順位	都道府県	のべ用例数	1分あたり用例数	収録時間（分:秒）
1	高知県	76	2.3	33:39	24	茨城県	21	0.5	38:50
2	佐賀県	57	2.1	27:35	24	群馬県	21	0.5	39:26
3	山形県	49	1.8	26:48	24	鹿児島県	21	0.5	44:07
4	福井県	29	1.3	23:07	24	北海道	20	0.5	37:06
5	徳島県	44	1.2	36:45	24	兵庫県	16	0.5	30:30
5	熊本県	32	1.2	27:05	24	鳥取県	3	0.5	05:28
7	滋賀県	42	1.0	40:02	30	岩手県	18	0.4	46:52
7	青森県	38	1.0	36:26	30	栃木県	15	0.4	34:43
7	福島県	24	1.0	23:23	30	広島県	15	0.4	38:08
7	京都府	24	1.0	24:19	30	神奈川県	14	0.4	34:43
11	山口県	34	0.9	37:09	30	新潟県	14	0.4	36:35
11	東京都	31	0.9	34:51	30	宮崎県	12	0.4	30:45
11	愛媛県	29	0.9	31:48	30	大阪府	11	0.4	28:12
11	秋田県	22	0.9	25:49	30	富山県	9	0.4	21:58
11	宮城県	20	0.9	22:04	38	埼玉県	10	0.3	37:59
16	奈良県	28	0.8	33:39	38	三重県	9	0.3	28:13
17	福岡県	33	0.7	45:00	38	香川県	9	0.3	35:56
17	愛知県	23	0.7	33:28	41	島根県	8	0.2	35:12
17	山梨県	19	0.7	26:36	41	静岡県	4	0.2	23:43
20	大分県	25	0.6	43:40	43	石川県	2	0.1	21:26
20	千葉県	24	0.6	37:51	43	長野県	2	0.1	18:38
20	和歌山県	19	0.6	31:45	43	岐阜県	2	0.1	14:05
20	岡山県	17	0.6	27:36	平　均		22.1	0.7	31:12

いうかたちで県別比較している。次のとおりである（表1）。

これによると、関西が上位に来るというわけではない。10位までに滋賀県・京都府があるものの、大阪府は31位になっている。

ここで考えられるのは、関西人の話し方にオノマトペが際立つのは、オノマトペの数が多いという理由によるのではなく、むしろ文中でのオノマトペの用法に依るのではないかということである。関西人の話し方の特徴は、現場性を大事にし、はじらうことなく、生き生きと描写することを好み、また、場面を共有することで、話す人と聞く人の距離を近くする点にあると言われている。その効果を上げるために、オノマトペが有効に働いているのではないか。西加奈子『円卓』の中で、好きな子に、弾んだ気持ちで、金持ちの屋敷のことを話す場面で、

「せやで！　塀がばーっとあってやな、屋根もだーっとしとってやな、玄関の階段ぶーんとあってやな！」

ゴックンは、こっこと香田めぐみさんが一緒に歩いていることが嬉しいのだ。何せクラスで一、二を争う美女だ。はりきって使う擬態語が、舞う舞う

とある。久木田（1990）では、関西方言の談話展開は、立場・状況を説明していく（状況説明累計型）としているが、オノマトペで具体的にイメージさせて述べていくことも、そうであろう。何度もあげるが、小林・澤村（2014）の「言語的発想法」の発達した関西方言での話し方を特徴づける一つではないかと考える。

さらに関西に特徴的なのは、オノマトペに付く「と」の無い用法である。朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』の中で、男子高校生は、

何言っとるんやてー、お前馬鹿みたいにボールバーンはじいとったやんけ！

と言っている。また、関西弁を説明したサイトでは、

- お好みはやっぱり、ドロぶわーかけたほうがうまいでぇ。
- きのー風びゅー吹いとったやん。そやから干しとった洗濯もん飛ばされてもたわぁ。
- 「この辺にコンビニあります？」「そこのしんご右ぃまがってびゅー行ったらありますわ。」
- そんなおしょぉーゆーばーかけたらあかんやん。
- さっきまで晴れとったのに。雨だーふっとうわ。

http://homepage2.nifty.com/GANSO_hirokun/kouza13.html

といったものが見られる。

「風がびゅーと吹いた」などの「と」があるものは、統語的には「びゅーと」は「吹いた」に直結するものであり、「吹いた」が中心である。ところが、「びゅー吹いとったやん」となると、「びゅー」が「吹いとったやん」に係るという縛りから解放され、意味的には独立性が高くなる。

このように、「と」の無いことにより、文中での遊離性が際立つことになり、オノマトペは文中での位置も自由になる。そして、それが、定延（2015）が、田守・スコウラップ（1999）を引用して説明している「文外独立用法」にもなり、

○カチカチ，合図の音を聞いて一郎は外に出た。

のような文を可能にしている。この「文外独立用法」は、事態を極めて高い臨場感で描き出すもので、一般のオノマトペよりもさらに高い臨場感を表し、まるで発話の場で音が実際に鳴っているかに思わせることを定延は説明している。

さらに、この用法を大阪弁として評価するのは尾上（2001）で、

「ボチャーンとねこ池落ちよってん」と「と」の字を入れればもはやこの表現は死んでしまう（少なくとも大阪弁ではなくなる）のであって、（以下略）

と説明している。この高い臨場感が、関西方言の話し方の特徴であり、状況説明の客観性の典型的なひとつとされよう。

ただ、この用法が関西方言で現実にどの程度使用されているかは問題である。定延（2015）の脚注では、

大学生30名に対する筆者の調査では文外独立用法の利活用者は8名にとどまり、「わざとらしい」という印象が目立った。

と言っている。

まとめ

3つの観点から、オノマトペの地域差をみてきた。まず、東北地方は、ある表現をする場合にオノマトペを用いることが多く、西日本、特に近畿地方と対立的であることを述べた。これは言語的発想法の発達した近畿と、そうではない東北ということでもあった。

次に、「オノマトペ＋めく」の動詞化したものが東北と奄美・沖縄に多く、古典語でも多いことから、周圏論的分布であると指摘した。これも「オノマトペ＋する」のかたちで、より客観的に表現する傾向への変化であると考えられる。

そして、関西方言では、その客観的表現が発達し、「ガーッしゃべる」のように「と」抜けのオノマトペ用法が発達し、さらには「ボチャーンねこ池落ちよってん」

のような文外独立用法も見られることを指摘した。

方言オノマトペに関する課題は多いが、まずは、絶対的に不足している資料収集に取り組んでいきたい。

参考文献

尾上圭介（1980）『大阪ことば学』，創元社

尾上圭介（2001）「ボチャーンねこ池落ちよってん―表現の断続と文音調―」，『文法と意味Ⅰ』，くろしお出版

川越めぐみ（2005）「東北方言オノマトペの特徴についての考察」，『言語科学論集』9

川越めぐみ（2011）「山形県寒河市方言におけるABラABラ型オノマトペについての考察」『国語学研究』50

久木田恵（1990）「東京方言の談話展開の方法」，『国語学』，162

郡　史郎編（1997）『日本のことばシリーズ　大阪府の ことば』，明治書院

小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史」，小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』，ひつじ書房

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』，岩波新書

齋藤ゆい（2007）「方言オノマトペの共通性と独自性―宮城県旧子牛田町と高知県安芸郡奈半利町との比較―」，『高知大国文』38

定延利之（2015）「遂行的特質に基づく日本語オノマトペの利活用」，『人工知能学会論文集』30-1，SP-2-0

澤村美幸（2010）「感動詞の地域差と歴史―「失敗の感動詞」を例として―」，小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』，ひつじ書房

竹田晃子（2011）『東北方言オノマトペ用例集』，国立国語研究所

田原広史（2001）「ピャッとちぎってシャッと渡す―関西弁のオノマトペ―」『月刊言語』30-9

田守育啓・ローレンス＝スコウラップ（1999），オノマトペ―形態と意味―，くろしお出版

平田佐智子他（2012）「オノマトペ対する意識の地域比較」，*The 26th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2012*

広田由貴子（1982）「福岡県築上郡築城町寒田方言のオノマトペの形態分析」，『国文学攷』94

方言研究ゼミナール（1992）『方言資料叢刊』第二巻 身体感覚のオノマトペ

三井はるみ・井上文子（2007）「方言データベースの作成と利用」，小林隆編『シリーズ方言学4　方言学の技法』，岩波書店

室山敏昭（1971）「方言の擬声語・擬態語」，『鳥取大学教育学部研究報告』22（1）

【付記】

本稿は、第52回表現学会全国大会シンポジウムで報告したものである。席上、あるいはその後、多くの方から貴重なご意見をいただいた。記してお礼申し上げます。

（県立広島大学名誉教授）